

ため、術前の綿密な準備、術式の習熟努力、厳密な感染対策などが重要と考えられる。さらに、長期経過の確認や症例数の蓄積、それら进行分析することにより、顎関節人工関節全置換術の有効性を評価していくことも重要と考えられる。

5. von Willebrand 因子活性低下を認めた歯肉出血の 1 例

A case of gingival bleeding with decreased von Willebrand factor activity

○鈴木 舟, 小松 祐子, 山谷 元気,
川井 忠, 宮本 郁也, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座
口腔外科学分野

【緒言】 von Willebrand 因子 (vW 因子) は血小板の血管損傷部への粘着を仲介し、さらに第Ⅷ凝固因子と複合体を形成することで止血機序を担う。今回われわれは、頻回な歯肉出血を認め、最終的に vW 因子活性低下が判明した症例を経験したので報告する。

【症例】 39 歳、女性。歯肉出血を主訴に附属病院救急外来を受診した。既往にインフルエンザ脳症と高血圧症がある。右側上顎臼歯部歯周炎による出血を認め、3 日間で 5 回の受診を繰り返した。その都度局所止血で対応可能であったが、頻回な再出血を認め、受診時血圧は高値であった。内科に血圧コントロールを依頼し、採血検査で vW 因子活性低下を認めたため血液内科へ対診した。5 ヶ月後、vW 因子活性は自然回復した。

【結語】 出血を主訴に受診する患者はその原因が様々であり、局所止血が可能であっても全身疾患が隠されている可能性を疑うことが重要である。

6. マウス末梢血から抗炎症性マクロファージを効率的に調製する条件の検討 ～新たな細胞治療の樹立の試み～

Establishment of efficient preparation of immunosuppressive macrophages from mouse peripheral blood for cell-based therapy

○滝沢 尚希, 客本 齊子*, 加茂 政晴*,
帖佐 直幸*, 鈴木 啓太, 中里 茉那美,
佐々木 大輔, 石崎 明*, 八重 柏隆

岩手医科大学歯学部歯科保存学講座歯周療法学分野, 岩手医科大学大学生化学講座細胞情報科学分野*

【目的】 抗炎症性 MΦ (M2-MΦ) は、抗炎症性サイトカインなどを発現し、炎症の収束に作用することが知られており、炎症性疾患に対する細胞治療への応用が有効と考えられる。我々はこれまでにマウスの骨髄の低酸素培養下において、間葉系幹細胞 (MSC) から分泌される液性因子 (M-CSF) と、MSC 上の接着因子 (ICAM-1) が、血球系マーカー陽性の骨髄由来血球細胞を増殖促進し、さらに M2-MΦ に分化誘導することを見いだした。今回我々は、M2-MΦ の大量培養法の確立を目的として、マウス末梢血から M2-MΦ を効率よく調整する条件を検討したので報告する。

【材料及び方法】 3 週齢の赤色蛍光マウスの脛骨から通法により骨髄細胞を採取し、MSC 増殖培地を用いて低酸素条件下で 2 週間培養した。2 継代培養した骨髄細胞から MSC 及び血球系細胞画分を分離し、各細胞の増殖能、分化能、ならびにフローサイトメトリー法によるマーカー発現を解析した。また、マウス顎骨後部から末梢血を採取し、MSC と末梢血の接着共培養系、非接着共培養系、末梢血を M-CSF で刺激した単独培養系それぞれの M2-MΦ マーカーの発現状況を、フローサイトメトリー法で比較検討した。

【結果及び考察】 MSC は自身の分泌する M-CSF により未分化の M2-MΦ 前駆細胞の増殖を促進させるとともに、M2-MΦ 前駆細胞との細胞間接触作用により M2-MΦ の population を増加させた。我々は最近、マウス顎骨後部の静脈から採取した末梢血に M-CSF で刺激することで MSC の存在なく末梢血単独培養で M2-MΦ を生成する条件を見出した。さらに現在では、末梢血から M2-MΦ への分化誘導を促進する因子ならびに抑制する因子を検討している。これらにより、歯周病をはじめとした炎症性疾患の細胞治療に用いるための M2-MΦ 大量調整法の確立を目指している。